

## 〔研究ノート〕

## 西湖図のイメージと呉越国—天寧寺所蔵 如寄筆「西湖図」

中国浙江省杭州市は江南を代表する大都市の一つです。市街地の西側には西湖があり、春から夏にかけては柳が揺れ、秋には金木犀が芳しく、湖の周辺には旅行者だけでなく、地元の人々が憩う姿が一年中見られます。西湖周辺は古くより景勝の地として知られ、季節折々の見どころは南宋時代には「西湖十景」とされて多くの詩人によって詠われ、また描かれてきました。南宋時代の「西湖図巻」(図1 上海博物館所蔵)は、画面下端に城門を配し、南宋の宮城や街側から西湖を眺めた景色が描かれています。西湖図には本図のように山水画の要素が強いものと、景物の名称を画中に書き込んだ名勝案内図または地誌図に近いものがありますが、西湖の構図は本図と同様に市街から眺めるものが大部分を占めます。絵画における西湖のイメージは南宋時代に確立しますが、西湖の景観を特徴づける重要な景物には、呉越国時代(907-978年)の建造物が多く含まれ、イメージ形成には呉越国が深く関わっています。

本稿では、如寄筆「西湖図」(図2 京都・天寧寺所蔵、室町時代※本年度秋の特別展「呉越国—西湖に育まれた文化の精粹—」にて展示)から西湖図に描かれた呉越

国に関連する景物を見ていきます。本図は、画面左上端に落款「大明遊子樗屋如寄写」、印章「如寄」(白文方印)があります。延宝六年(1678年)狩野永農編纂『本朝画史』には如寄について、筆法が雪舟(1420-1506年)に慕っており、来日した明人ではないかと記されます。本図に見られるやや硬い墨線を輪郭に用いる筆使いは雪舟ほど力強くはないものの、彼の代表作「秋冬山水図」(国宝、東京国立博物館蔵)に近く、斜め俯瞰の構図は「天橋立図」(国宝、京都国立博物館蔵)に通じます。しかし、その後の研究によって、如寄(生没年不詳)は号を樗屋、遣明使に伴い渡明し、弘治九年(1496)に帰朝した人物であることが判明しています。

西湖図は日本でも室町時代以降描かれ、狩野派の絵師によって幽玄で叙情的な山水図として数多く描かれています。本図に見られる名勝や名刹を強調し、それらの名称を書き込む西湖図は、秋月等観が渡明した際に描いた作品(「弘治玖年」銘(1496) 石川県立美術館蔵)があります。

さて、本図は西湖を中心に周囲の景観が实景に近い視点で描かれ、名勝や名刹には名称が計22ヶ所記されています(図3)。これらに導

かれながら西湖を取り巻く情景を眺めると、画面手前左右には前景として西湖の東側にあたる街へと続く銭湖門(画中では「銭唐門」。以下同様に、画中の文字には「」を付す)と「湧金門」、「豊楽楼」、断橋(「六橋」)を描き、西湖南岸の雷峰塔(「雲峰塔」、南屏山(「南屏山」)、「浄慈寺」が描かれます。雷峰塔は呉越国第五代国王 銭俶と妃 孫氏の発願により建造され、太平興国二年(977)に竣工しています。南宋の紹興年間に現在の名称に改められた浄慈寺は、もとは銭俶により顕徳元年(954)に建てられた慧日永明院で、銭俶と縁の深い僧である道潜や延寿が住持しました。

中央に広がる西湖を半円形の橋が連なり横切る蘇堤(「蘇公堤」)は、宋の詩人で杭州知事であった蘇軾によって築かれました。湖中の最も大きな島が孤山です(「孤山寺」と「三賢堂」)。画面の右端から上方にかけては西湖の西側へと続く風景をあらわし、高く聳える「北高峰」の麓に「靈隠寺」・「冷泉寺」・「九里松」・「呼猿洞」、画面左に向かって「飛來峯」・「三竺浄土」の「上天竺寺」・「中天竺」・「下天竺」、南高峰、「銭塘」へと続きます。飛來峯は広順元年(951)に開鑿され、石窟や摩崖仏の造像は元時代まで続けられました。靈隠寺は銭俶が建隆元年(960)に重修して石塔を建て、開宝二年(969)にも境内に二基の石製経幢を建ており、これらは現在も残されています。

画中に記された名称を実際の名称の位置と比較すると(図4)、雷峰塔が「雲峰塔」とされるなど、明らか

に記し間違えていると見られる箇所があります。画面右下には「涌金(豊豫)門」とその門外に南宋時代に賑わった酒家の「豊楽楼」が描かれ、その脇の橋に「六橋」と付されますが、六橋は蘇堤に設けられた六つの半円状の橋を指すため、孤山の手前に置かれる橋は白堤へ繋がる断橋と見られます。また、左下の城門は「銭唐(塘)門」ではなく、雷峰塔に最も近い銭湖門の誤りでしょう。

いくつか名称の齟齬はありますが、西湖のイメージを構成する重要な名所に呉越国との深い関わりがあることがわかります。本図に描かれた景物の位置を勘案すると、前景から西湖にかけてと遠景としての西湖西側に対する視点は、起点とする場所を異にし、市街の南側からと北側(現在の武林広場付近)からと考えられます。如寄は渡明しているため、西湖を様々な方向から眺めた可能性が考えられます。前述のように多くの西湖図が市街からの景観として描かれており、これらの作例をもとに描かれた可能性も考えられますが、西湖の名勝を画面内に納めるためにあえて視点をずらして構成したと考えられます。本図には湖に浮かべた舟上に憩う人々や蘇堤を往来する人々、南高峰への山道を登る人物など、様々な人物が描き込まれています。これら西湖に集う人々の姿や湖畔に並ぶ柳は現在の情景にも通じ、画家の実感を反映した表現と言えるのではないのでしょうか。(瀧朝子)

※図1は『世界美術大全集』東洋編6 小学館 2000年より転載させて頂きました。

図1



図4



図2



図3

